2023年度
情報経営イノベーション専門職大学
入学者選抜試験 一般入試B日程

国 語

注 意 事 項

1. 試験時間は60分。
2. 試験開始の合図があるまで問題冊子を開かないこと。
3. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を高く挙げて監督者に知らせること。
4. 解答用紙には解答欄以外に受験番号等の記入欄があるので、監督者の指示に従ってそれぞれ正しく記入すること。
5. 解答は、問題に対応した解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 問題冊子は持ち帰らないこと。
7. 試験終了まで退出しないこと。

一

次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

地域再生主体の形成過程は、共通して大きく次の三つのステップに分かれていた。

①関係人口(注)が地域課題の解決に動き出す

いずれも始まりは、①関係人口がそれぞれの地域課題の解決に、主体的に動き出したことであった。海士(あま)町では岩本氏、江津(ごうつ)市では田中氏、まんのう町では田口氏が、最初に動き出した関係人口にあたる。

岩本氏は、もともと東京の企業で人材育成に携わっており、「教育を通して社会をより良くしていきたい」という思いがあった。海士町役場で島前高校の存続問題を担当していた吉元氏と交流事業を通じて知り合ったことで、廃校寸前の同校をどうやって存続させたらよいかと相談を受け、移住して一緒に取り組んでほしいと熱心な働きかけを受けた。

高校存続問題を「地域社会における教育の課題解決」であると捉えた岩本氏は、自分のやりたいことと重なっていたと明言している。加えて「この人たちとなら何かやりたいと思えた」こともあり、Iターン(注)して関わることを決めた。

また、田中氏は、兄や自分自身が就職で島根に帰ることについて、都会での就職と比べて「つまらないこと」のように周りから受け止められていることに反骨心を持ち、「帰ってこれる島根をつくろう」という強い思いを持っていた。江津市には行ったこともなかったが、コンテストを面白そうと感じて応募し「帰ってこれる島根」の実現に向け、大学生のインターンシップ事業などを通じて挑戦する若者を支援するプランを考えたのである。そして大賞を受賞し、同市にIターンして活動を始めた。

田中氏は、応募前に江津市に友人・知人がいるわけではなかった。しかし、コンテストへの応募と受賞の過程を通じて、企画・運営に関わっていた地域住民の中川氏、横田氏とのつながりができ、着任前から、中川氏からは「ぜひ、力を貸してください」とメールが届き、横田氏にも電話で「待っているからね。こんな楽しみな春は久しぶりだ」と期待された。

一方、田口氏は、琴南(ことなみ)支所の雨霧氏らから、ことなみ未来会議のまとめ役への就任の依頼を受けたことがきっかけである。もともと直接依頼される案件にはできる限り応えたいと考えていたことに加え、いわゆる〝普通〟の地域の再生に関心があった。雨霧氏らからの依頼はその条件に当てはまっていたことから引き受けることにし、定期的に通い始めた。

三人の関係人口は、それぞれ自身の関心や問題意識が根底にあり、それに重なる地域課題の解決に向けて動き出したのである。関係人口自身の主体性が存在しているということは、重要な出発点である。そして、そこには地域住民とのつながりが存在していた。

②関係人口と地域住民の間に信頼関係ができる

関係人口が地域課題の解決に動き出した次のステップは、最初につながりがあった地域住民とは別の地域住民との間に信頼関係が結ばれ、そしてその地域住民が主体性を獲得していく段階である。

海士町では、岩本氏を呼び寄せた吉元氏は町職員という立場で県立高校の存続問題を担当しており、実際の県立高校に対しては町と県という行政の壁もあって権限を行使することが難しかった。そのため、岩本氏は高校の存続問題に取り組んでいながら、席を高校の中に置くことも実現していなかった。さらに、教員ではない岩本氏が職員室に入ると緊張感が走り、ピリピリした空気が漂うほど教員からも警戒されていた。

岩本氏は、「いくら意味のある提案をしても、信頼関係がなければ聞く耳さえ持ってもらえない」ことに気づき、東京時代には吸うことはなかったタバコを買って、学校の喫煙室に出入りして休み時間に来る教員をつかまえては、生徒や授業のことを聞いた。飲み会にもできる限り参加し、話に耳を傾けた。また、教員よりもカリキュラムについて詳しく勉強するなど努力を重ねた。

これらの結果、来島三年目にしてようやく校内に席が置かれることになり、岩本氏を警戒していた教員で社会教育主事の浜板氏も、岩本氏の努力や酒宴や喫煙、雑談にも付き合う姿を見るうちに「プロだな。身を削ってでも、目的のためには徹底的に努力する。俺にはできない」と信頼を寄せるようになった。そして、岩本氏が高校に来やすいタイミングを連絡し、話を進めやすくする環境をサポートするなど、主体的に高校魅力化プロジェクトの一員として動くようになったのである。

岩本氏は地域住民との信頼関係を築くためにかなりの時間と労力を費やしたと言える。

一方、田中氏は、スタッフとして所属したてごねっと石見(いわみ)(注)に、前述の地域住民の中川氏は理事、横田氏は理事長としてともに深く関わっていたことから、着任後も信頼関係を維持しながら、さらに深めていくことができた。

ビジネスプランコンテストで掲げた「帰ってこれる島根」や、大学生のインターン事業をてごねっと石見でそのままやってほしいと言われたと振り返り、「周りの人にも理解というか、応援してもらえる体制ができたので、怖さはなかった」と述べている。

こうして田中氏がてごねっと石見のスタッフとして働く中で、てごねっと石見の理事であり、江津万葉の里商店会会員の藤田氏ともつながりができていった。藤田氏は「江津のため」と一生懸命に動く田中氏を見て「地元に住む私たちも何かしたい」と心が揺さぶられ、ちょうど全国商店街支援センターの現地マネージャー育成事業の募集があったことから、思い切って手を挙げたのである。

藤田氏は、田中氏らのことをヒーローにたとえて「ヒーローは居続けられるわけではないので、自分たちがやらなきゃいけない。ヒーローのおかげで、自分たちが変わった。やったらできると分かった」と語っている。ヒーローという関係人口ではなく、自分たち、つまり地域住民こ

そが地域課題を解決するのだという主体性を持つようになり、空き店舗活用に向けて第一回の「手つなぎ市」を田中氏と力を合わせて開いた。

また、まんのう町では、田口氏は旧琴南町内の中でももっとも人口減少が進んでいる川奥地区を調査し、報告書をまとめる中で、転出子[注]が高齢者の生活を支えていることに気付いた。そこで、転出子が集まる転出子懇談会をほぼ毎月開催し、その過程で、転出子の一人である横井氏ができる限り参加してくれたり、他の人が気を遣って言いにくいことも実直に言ってくれたりする姿を見て信頼を深め、人間関係をつくっていった。

そしてもともとは地域課題をさほど意識していなかった横井氏は、田口氏に繰り返し行政の限界を説かれる中で、「困っていることは、自分らでなんとかせんといかん」と考えが変化した。

[③]地域住民との信頼関係に時間がかかった岩本氏と、移住前から信頼関係が築かれていた田中氏のケースは特に対照的である。これは、岩本氏と田中氏の間に資質や姿勢の差があったというよりは、地域においてよそ者に信頼性を付与する枠組みが用意されていたかどうかの差であろう。この点は重要であるため、後述する。

③地域住民が、地域課題の解決に動き出す

最後は、主体性を獲得した地域住民が地域課題の解決に動き出す段階である。

海士町では、高校魅力化プロジェクトに後ろ向きであった浜板氏が、地域住民であり教員でありさらに社会教育主事でもある自分だからこそできる、島前地域全体をつないだり、地域と高校をつないだりする役割をこなしていくようになっていった。

浜板氏と吉元氏、岩本氏の三人は、仕事を終えて深夜に集まっては議論を重ねた。「できない言い訳ではなく、できる方法を考えよう」を合い言葉にしながら、三方それぞれにとって良い「三方良し」を大切にし、行き詰まったときは、一服や雑談もはさみながら、粘り強く話し合った。三人の信頼関係は深まり、一つのチームとして高校魅力化プロジェクトを構想、実行していく原動力となった。

加えて、浜板氏以外の地元出身の教員も、浜板氏が懸命に汗をかいていたり、岩本氏がこれまでにない発想で取り組んでいたりする姿に心動かされ、それまではさほど意識してこなかった地域のことを「地元の人間としてもっと考えないといけない」と感じるようになった。さらに「もっともっとできることはある。私も精一杯、やりたい」と変容して、実際に高校と学習センターの連携を進めていったことは象徴的である。

また、江津市でも田中氏に触発された藤田氏が、第二回のコンテストで大賞を受賞して関わるようになった関係人口の三浦氏と協力し、江津万葉の里商店会の若いメンバーと青年部を立ち上げてコミュニティバーを運営した。このコミュニティバーは評判となり、わかりやすい成功例が見えたことで、「自分もお店を出したい」「空き店舗はないか」と相談が増え、空き店舗の間取りや雰囲気を熟知する藤田氏が物件を紹介して

いく流れができた。

てごねっと石見理事長であった横田氏も「よそ者が地域という水たまりに石を投げて、変化のきっかけになり、その変化が動きとして結び付いている。地域の人がやらない限り、継続と成長はない」と、関係人口である田中氏と三浦氏がきっかけとなって地域住民が主体性を持つように変容し、それが成果につながっていることを証言している。

一方、まんのう町でも、転出子である横井氏が、幼なじみで同じく転出子の一人である高尾氏らに声を掛け、ほかの川奥地区の消防団メンバーも巻き込みながら、災害時の安否確認に使う「集落カルテ」を作成した。

以上の三つのステップをまとめる。

第一ステップが、関係人口が地域課題の解決に動き出す段階である。関係人口は、それぞれ自身の関心や問題意識が根底にあり、それに重なる地域課題の解決に主体的に動き出していた。そして、そこには地域住民とのつながりが存在していた。

続いて、関係人口と新たな地域住民との間に信頼関係ができる第二ステップがある。地域住民はその影響を受け、自分たちこそが地域課題を解決する当事者であるということに気づいて主体性を獲得していくのである。これは相手との間に信頼関係が築かれたからこその相互作用であり、信頼関係のない相手からは影響を受けにくいであろう。

次が、主体性を獲得した地域住民が地域課題の解決に動き出す段階である。地域住民がこれまで信頼関係を築いた関係人口だけでなく、④新たな地域住民や新たな関係人口と信頼関係を広げ、地域課題が解決されていく。これが第三ステップである。

以上の三つのステップを地域再生主体の形成過程として捉え直すと、地域課題に関心がある関係人口が、地域住民との間に多層的に信頼関係を築くことで地域再生主体として形成され、さらにその影響を受けて地域住民が地域課題の解決に主体的に動き出し、⑤地域住民も新たに地域再生主体として形成されたと捉えることができる。

（田中輝美『関係人口の社会学』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

語注

・関係人口……移住者でも観光客でもなく、その地域と何らかの関わりがある人。

・Ｉターン……東京など、都心部で生まれ育った人が地方企業に就職、転職すること。

・てごねっと石見……創業支援・人材育成を行う島根県江津市のＮＰＯ法人

・転出子……地域から転出した子ども。「他出子」とも。地域に残っている親に対する語であるため、必ずしも未成年というわけではない。

問一　傍線①「関係人口がそれぞれの地域課題の解決に、主体的に動き出したこと」とあるが、どういうことか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　地域に住む人々が、自分の住む地域の課題を解決するために、活動し出したこと。
イ　かつてその地域に住んでいた人が、自分の住む地域に戻って、課題を解決するために奔走したこと。
ウ　地域とたまたま関わりのあった人が、自分の意志でその地域の課題を解決しようと行動したこと。
エ　地域と関わりのなかった人が地域から呼ばれ、自分の関心や問題意識を基に、課題解決に向けて活動したこと。

問二　傍線②「次のステップ」に関わる行動として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア　関係人口が信頼関係をつくりやすいように、地域住民がたばこを吸うことをすすめた。
イ　関係人口がいつかはいなくなるということに気づき、地域住民が自らプロジェクトを進めた。
ウ　関係人口が開催した会議に転出子はできるだけ多く出席し、言いづらいことも率直に発言した。
エ　関係人口から受けた指摘を転出子が真摯に受け止め、自分たちの課題として主体性を持った。

問三　傍線③「地域住民との信頼関係に時間がかかった岩本氏と、移住前から信頼関係が築かれていた田中氏のケースは特に対照的である」とはどういうことか。その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　岩本氏のケースも田中氏のケースも、信頼関係がうまれる成功例として特筆すべきものであるということ。
イ　岩本氏のケースも田中氏のケースも、地域住民が課題を解決する前に信頼関係を重視していた点で同じであるということ。
ウ　岩本氏のケースと田中氏のケースとでは、信頼関係をつくる過程において、大きな違いが認められるということ。
エ　岩本氏のケースと田中氏のケースとでは、地域住民の課題解決に対する主体性に大きな差があったということ。

問四 傍線④「新たな地域住民や新たな関係人口と信頼関係を広げ、地域課題が解決されていく」ことの例として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア 浜板氏と吉元氏、岩本氏の三人で議論を重ね、信頼関係を深めていった。

イ 浜板氏だけでなく、地元出身の教員も協力し、高校と学習センターの連携を進めた。

ウ 藤田氏が三浦氏と協力し、商店会を巻き込んでコミュニティバーを運営した。

エ 横井氏が高尾氏や消防団に声をかけ、集落カルテを作成した。

問五 傍線⑤「地域住民も新たに地域再生主体として形成された」とあるが、その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 地域住民が地域の抱える課題に気がつき、自らの力だけで解決しようとする意志を固めたということ。

イ 地域住民が関係人口となり、自分の地域だけでなく、別の地域の新しい課題を解決する意欲をもったということ。

ウ 地域住民が、別の地域住民や関係人口と新しく関係を持ち、課題解決に動き出すようになったということ。

エ 地域住民が転出子を呼び寄せ、地域住民と転出子が一体となって解決していく体制を整えたということ。

問六 本文中で述べられている、各地域の関係人口と地域住民についての説明として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア 海士町の関係人口は岩本氏で、地域住民は浜板氏と吉元氏である。

イ 江津市の関係人口は田中氏で、地域住民に三浦氏と中川氏がいる。

ウ 田口氏はまんのう町の関係人口である。

エ 横井氏と高尾氏はまんのう町の転出子だが、雨霧氏は地域住民である。

二

次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

コロナでは経済の問題も大きくクローズアップされた。もともと経済に関しては、私はまったくの素人である。国際経済なんて、考えるのに必要な情報は、要素が多すぎてほとんど爆発的ではないかと思う。

アベノミクスはよくわからなかった。フツーの人にはわからなかったと思う。わからないことがわかったから、アベノマスクになったのかもしれない。これならよくわかる。マスクが足りないなら、皆に配ればいい。だからマスクを配った。でもつけない人が多くて余った。小学生でもわかると思うし、私だってわかる。

コロナで働くところがなくなったから、収入が減った、なくなった。この対策はどうか。マスクと同じように皆にお金を配ればいい。

三十万円の給付という話が一時出たが、これはダメだろうと思った。なぜなら話が面倒だからである。三十万円になる人と、ならない人を、どう分けるのか。それをきちんと決めると際限がなくなり、先(注)の不確定性原理に引っかかる。

どう分けたって、あれこれ議論と問題が起こるに決まっている。厳密に規定すればするほど、問題が増える。そんなこと、考えなくたってわかる。政治家は票が死活問題である。部分的に三十万円を配ると、自分の支持層に届かない可能性がある。それなら全体に配ってしまうほうがいい。

というわけで、結果、十万円の一律配分になった。この分配もきわめてわかりやすい。わかりやす過ぎるくらいである。

では①こうした対策のどこに「人知の進歩」があるのか。

私は政治は嫌いだと公言しているが、今回の対策なら、私でも政治家ができるかなあと思ってしまう。べつに対策を批判しているのではない。そうするしかないんなら、それでいい。ともあれ、人知には、進む部分と進まない部分があるらしい。進むと思われる部分は認識で、対応策つまり動きの方は結局は昔のまま。

テレビでこの十万円の対策は間違っていると強い口調で述べた人があった。ただし理由までは放映されなかった。たぶん財務省関係の人ではないかと思う。②財務省が財政均衡、入った分だけ使え、という原則にこだわることは、私でも知っている。財政均衡の重要性は、(注)二宮尊徳(にのみやそんとく)の時代からわかっている。

では今回のように、裏付けのないお金を支出することはどうか。尊徳に訊(き)いてみたい。政府がお金を出すとき、じつは裏付けはいらない。それは現代貨幣理論が説くところである。

では裏付けのないお金を出せば、結果はどうなるか。③その国のお金の価値が下落する。それはインフレとは少し違う。インフレは、ぜひ必要

だという需要に対してモノの供給が不足することである。不足するのがマスクだけならそれほど問題はないと思いますけどね。とはいえ、今や、マスクは余り気味で、足らないのはワクチン。いや、ワクチンも余って来て、三回目の接種をどうこうし始めている。これもまた変わるのかもしれない。

「ぜひ」でない供給不足なら、バブルという。いまはむしろモノ余りで、おそらくインフレの心配はない。バブルが起きて、だれかが不用なものをたくさん買って、その価格が高騰したって、もともと不用なんだから、私の知ったことではない。お金の持ち主が替わるだけである。

世界に存在する価値が一定だとしよう。お金はその価値を代替している。そこでお金の量だけをただ増やせば、つまりいわば「お金が湧いてくる」なら、お金の価値はどうなるのか。下落するであろう。財務省が本能的に嫌うのは、この種の問題ではないか。

財務省の「権力」の根源はお金の配分にある。そのお金は世間に価値を生み出すあらゆる活動と結びついている。そこを左右するから、財務省が「偉い」のである。その時にお金の量だけ勝手に増えるなどという椿事（ちんじ）が起これば、それは許せなくて当然である。私は財務省のことなど、さっぱりわからないから、そう疑うだけですけどね。

いまは社会の状況が悪いから、それを考えて政府が補償し、お金を支出する。でもそのお金にプラスの裏付けはない。出所は政府の意思という、当座の怪しげなものである。民主主義だから、国民の意思かなあ。それなら医療関係者や人前で働かざるを得ない人たちには、百万円を余分に配分してもいいんじゃないか。働きに応じて払うなら、そういうことになろう。このレベルの政策で政治家になれますかね。

裏付けのないお金の裏付けはなにか。ヘンな疑問だが、それに回答はある。供給能力である。お金だけが増えて、それが現実に動き出した時には、消費に回る。その消費を満たすだけの供給能力がなければ、インフレが生じる。国家経済を支えているのは、そこでは供給能力なのである。供給は可能か不可能かだから、きわめて明瞭である。

じつはこの分配には、お金をもらった人が助かるという、大きなプラスがある。しかし立場によっては、それはマイナスに勘定されるであろう。いわば働かなかったことに対して対価を支払うからである。こんな一見ヘンな状況は、財務省はもちろんのこと、ほとんどの人が真面目に考慮していなかったであろう。

お金は労働の対価として支払われる。それがこれまでの常識だったと思う。でも今回は逆である。逆の状況が現に存在することが確認された。

働かないでいてくれて、ありがとうございます、お金を差し上げましょう——理想郷ですね、これは。とはいえ、フツーの状況でも働いたら所得税という一種の罰金を取られる。[4]分配政策にも、それなりの理屈が通っていないわけではない。

当たり前だと思うが、お金はもともと社会状況に結び付いている。そのお金自体の価値がフラフラする、あるいは下がることは、財務省の安

定を揺るがし、財務省の価値（あればの話だが）が下がることを意味する。

資本主義下の企業も同じであろう。お金の価値が揺らぎ、下がることは、根本的にはお金を稼ぐことの価値を下げる。生産年齢の人たちが必死で働く。そこでは生産し、お金を稼ぐことが、当然の価値として前提にされている。コロナが落ち着いたら、さて、どうなるか。

私は八十歳を超えているから、不労働非生産年齢に属し、生産＝価値には直接の関係がない。単純に生産＝お金＝価値と考える状況では、お金の価値が下がることは、生産という仕事に専念する人たちにとって、人生自体の価値の低下を意味する。歳をとればいやでも低下するんですけどね。

コロナの問題で暗黙に問われていることの一つは、それかと私は思う。歳をとれば実感するはずだが、サービスを含め、生産労働で計る個人の価値は、年齢とともに下がる。高齢化社会では、その価値は全体的にも必然として低下する。元気で働く。働くのはいいことだ。

だが、私は元気ではない。元気かどうかと聞かれたら、元気なわけがない。年齢の割には元気かもしれないが、それでも六十代に比較したらはるかに弱った。

働くという「いいこと」がこれまで通りにはできない。深沢七郎（ふかざわしちろう）の『楢山節考（ならやまぶしこう）』の世界なら、私はおりんばあさんと道連れ、とうに雪に埋もれて消えている。貧しい山間にある、姨捨山（おばすてやま）の伝承による小説だけど、それも今は遠い昔か。

とかなんとか言って捨てられかねない私がまだ生きて、ご覧の通り太平楽のごたくを並べている。いい時代なんですよ、現代は。でも、若い人たちをもっと大事にしなくていいのかね。

なにしろ、十代から三十代の若者の死因のトップは何だと思われるだろう。自殺である（令和二年人口動態統計月報、厚生労働省より）。

これまでは病気、ガン（悪性新生物）や心疾患といったものや、不慮の事故が死因に上がっていたのが、今では自殺が一位で、他の世代でも上位に上がってきている。昭和の初期にも自殺は死因にあったが、それは、例えば結核など貧困から来る病苦で迷惑をかけまいという自殺だった。内容が違ってきている。コロナの影響もあるのか、令和二（２０２０）年の小中高生の自殺者数は、その数自体が調査開始の１９７４年以降では最多だそうだ。この世に生きることの意味が見出（いだ）せない、これから長く生きていても意味がないと思い、若い人が死を選んでしまう。

どうすればいいんだ。そう訊く人があるかもしれない。

[5]要するに価値観を情勢に応じて自分で変え、自分なりに持つしかない。それを自立といい、成熟という。

生きるとはどういうことか、生きる価値はどこにあるか。これは哲学でも思想でもない。まさに具体的な自分の生き方である。すでに構築されたように見える社会システムに寄りかかってもいいけれど、それなら[6]そのシステムと共倒れの覚悟が必要ではないか。

戦時下の日本がそうだった。一億玉砕、本土決戦でしたからね。でも多くの国民にとって、それは本音ではなかった。だから一夜明けたら平和と民主主義、ある人たちには共産主義が正解となり、日常が戻ってしまった。とはいえ、その「日常」は以前と変わらないのだろうか。

（養老孟司『ヒトの壁』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

語注

・先の不確定性原理……筆者は「どこかに秩序が生まれれば、無秩序がそれだけ増える」「あちらを立てればこちらが立たず」と説明している。

・二宮尊徳……一七八七年～一八五六年。経世済民を目指して報徳思想を唱える。

問一 傍線①「こうした対策のどこに『人知の進歩』があるのか」の説明とあるが、ここから読み取れる筆者の意図として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア わかりやすい対策が、実は人知の進歩の成果であることを婉曲（えんきょく）的に述べている。

イ 選挙のことだけを考えた対策のため、進歩は認められないと直接的に非難している。

ウ 面倒なことを諦め、単純な政策に逃げることは、進歩とは離れた行為だと苦々しく思っている。

エ 選挙目当てと考えられる対応策では昔と変わらず、進歩がないと反語的に述べている。

問二 傍線②「財務省が財政均衡、入った分だけ使え、という原則」とあるが、コロナの対策ではどのようになるか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア 部分的に三十万円を支給すると、管理が大変なため原則に反するということ。

イ 十万円を支給されたら、すべて投資に使い、増やさなければならないということ。

ウ 十万円を支給されたら、その分、生活用品などの購入にすべて使わなければならないということ。

エ 十万円を支給するには、まず、収入としてその分の税金を政府が確保しなければならないということ。

問三　傍線③「その国のお金の価値が下落する」とあるが、筆者は何を危惧しているのか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　バブルが起きて、モノの値段が高騰すること。
イ　供給能力の不足によって、インフレが生じること。
ウ　財務省が不安定になり、財務省の価値が下がること。
エ　生産に従事する人の、人生自体の価値が低下すること。

問四　傍線④「分配政策にも、それなりの理屈が通っていないわけではない」とあるが、分配政策の説明として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア　社会状況が悪いため、政府が補償してお金を出すこと。
イ　供給能力しか裏付けのないお金でもって支払うこと。
ウ　働かざるを得ない人には、余分にお金を支払うこと。
エ　働かない人に対して、対価としてお金を支払うこと。

問五　傍線⑤「要するに価値観を情勢に応じて自分で変え、自分なりに持つしかない」とあるが、その例として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　体罰が許されなくなったため、生徒の指導方法を変えざるをえなくなった。
イ　持続可能な社会の大切さに気づき、プラスチックのストローを拒否するようになった。
ウ　昔と今とでは就職状況が違うため、親の意見に従って、専門学校に進んだ。
エ　インターネットで情報を集めるうちに、好みの情報だけを入手するようになった。

問六　傍線⑥「そのシステムと共倒れの覚悟が必要ではないか」について、生徒どうしで話し合っている。傍線部の理解として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア　生徒A：共倒れって怖い言い方ね。自分の生き方を見つけられなければ、それなりの覚悟をもって生きなさいということかしら。

イ　生徒B：筆者は自分の価値観を持つことが自立であり、成熟と言っているから、自立できない人は社会のシステムと共倒れをしてもしかたがないと考えているんだろうね。

ウ　生徒C：覚悟ができない人はどうするんだろう。書いていないからわからないけど、生きる価値を自分で見つけることが重要なのかな。

エ　生徒D：戦後、システムが壊れたけど、それぞれの生き方に価値がある日常が戻ってきたから、何とかなるということも伝えたいんじゃないかな。

三

次の文章を読んで、以下の各問いに答えなさい。

南太平洋、グアムとパラオを結ぶ線の上――両者の中間点よりわずかばかりパラオに寄った場所――に、ヤップという孤島がある（現在は、ミクロネシア連邦のヤップ州となっている）。一九〇三年、当時ドイツ領だったヤップ島に、アメリカの人類学者ウィリアム・ヘンリー・ファーネスが二ヵ月ほど滞在した。七年後、ファーネスは、この島の自然や島民の生活様式を記した本を出版した（Furness 1910）。ファーネスが「一日で歩いて回ることができる」と書くほど小さな島の人口は、わずか数千人。彼らの社会構造や神話にも文化人類学者や社会学者を刺激する興味深いことがたくさんあったが、①ファーネスを最も驚かせたのは、彼らの経済システムだった。

ヤップ島の市場で取引されている商品はたった三種類しかなかった。魚とココナツ、そしてナマコである。ナマコは、島民にとって唯一の贅沢な食品だった。美術品や工芸品のようなものもほとんどなかったし、唯一の家畜はブタだが、頻繁に取引される対象ではなかったようだ。これほど商品が乏しいとすれば、そして食物や衣類などの必要物はたいてい周囲の木々から直接得ることができるのだから、この島にはせいぜい初歩的な物々交換がある程度であろう、とファーネスは予想していた。しかし、この予想は完全に外れることになる。

ヤップ島には、複雑な貨幣システムがあったのだ。この島の経済には、まぎれもない貨幣があった。「まぎれもない」というのは、文字通りの意味で、貨幣はまことにあからさまなやり方で、人目に晒されていた。その貨幣は、硬貨以前の硬貨――というか石貨であった。自然の石がそのまま使われているわけではなく、きちんと刻まれ、一定の形をもたされた石の貨幣である。「フェイ」と呼ばれるその貨幣は、大きく硬く厚い車輪状の石である。つまり超大型の石の五円玉だと考えればよい。小さいもので直径一フィート（三十センチメートル）、大きいものは直径十二フィート（三メートル半以上）にもなったという。石の真ん中の穴の大きさは、石の直径に依存していた。というのも、その穴には十分な強度と太さのある棒を挿入し、その石の貨幣を運ぶことができる、と想定されていたからである。

この石貨は、ヤップ島の石から造られたものではない。ファーネスが島民から教えられた言い伝えによれば、はるか昔に石はバベルダオブ島から切り出され、ヤップ島に運ばれたものである。バベルダオブは、パラオ群島の最大の島である。石貨のもとになる石は、海によっておよそ五百キロメートル隔てられた別の島から来たことになる。石貨の価値は、主として大きさに依存していたが、ほかに粒子のきめ細かさや石灰岩の白さなどにも規定された。

一見、これほど貨幣に不適切なものはない。交換に使用されるということであれば、貨幣は持ち主の間を次々と移動しなくてはならない。しかし、フェイという重い石貨は、この島の他のどの商品よりも持ち運びに不都合だ。そこで、ファーネスは最初、盗難防止のためにこんな扱い困難な物を貨幣としたのではないか、と推測した。確かに、ナマコが欲しい者は、フェイを盗むくらいだったら、直接ナマコを盗むに違いない。

実際、フェイの盗難事件はほとんどなかった。

が、やがてこの推測の前提自体が誤っていることが分かってくる。[2] 先に述べたように、フェイは、真ん中に穴が空けられており、持ち運ばれることが想定されている。それにもかかわらず、実際にフェイが、一つの家から別の家へと物理的に運搬されることは稀だったのである。取引は頻繁に行われたが、取引によって生まれた負債は典型的には、単純に――売り手の側のもっている負債との間で――相殺された。それでも（どちらかに）負債が残るのが普通だが、問題はなかった。というのも、将来なされるだろう――つまり予期されてはいるが実現していない――交換を含めて、均衡が計算されていたからである。

当事者たちが、未払い分の決済が必要だという感覚をもつときもあるのだが、その場合でさえも、フェイ自体が物理的に交換されることは通常はない。どう対処するのか。ファーネスの記述から判断すれば、所有と占有との原初的な区別が、すでに効いている。つまり、石貨の所有者は、必ずしも、その石貨を占取すること、つまり石貨を手元に置くことに執着しない。大口の取引が成立したとき、フェイの新しい所有者は、そのフェイに対する彼の所有権が、取引相手から、そして共同体の仲間から承認されれば、十分に満足し、それ以上のことは求めない。ファーネスによれば、交換がなされても、所有者が変更されたことが石貨に刻まれることもなく、たいてい、石貨はもとの所有者の土地に放置されたのだ。

これではどのフェイが誰の所有物なのか分からなくなり、混乱するのではないか、と心配になる。が、それは無用のことらしい。[3] もっとはるかに驚くべきことが成り立っているのだ。ファーネスの（注）インフォーマントは次のようなことを語っている。村の近くに住むある家族は、異論の余地のない莫大な富をもっているのだが、村の中の誰一人として――実のところ当の家族自身でさえも――その富を実際に自分の目で確認したり、手で触れたりしたことはなかった。どういうことか。その富とは、具体的には、法外な大きさをもつフェイである。ならば、簡単に見られるはずではないか。だが、その大きさは、ただ伝承によってのみ知られているだけだという。なぜなら、そのフェイは、二～三世代前からずっと、海底に沈んだままなのだから。

何十年も前のはるかな昔――当時の村人が生まれるよりもずっと前ということになる――、バベルダオブ島からの輸送の途中に、このフェイを載せた舟は嵐にあって難破した。……ということになっており、島民はみな、その話を認めている。そして彼らはこう言う。偶然の事故でフェイが沈んでしまったことについてあれこれ文句を言っても仕方がない、と。たまたま海底に置いてあるということは、フェイの市場価値をいささかも毀損しない。「石貨の購買力はそのまま維持されており、あたかも所有者の家の壁にはっきりと外から見えるように立てかけられてあるかのごとく価値をもっていた」（Furness 1910:97）。

ヤップ島の経済についてのファーネスの以上のような報告は、出版から五年経ったときに、若きケインズの目にとまった。ケインズが見ると

ころ、通貨についてのヤップ島民の観念は、他のどの国のそれよりも真に哲学的である（Keynes 1915）。最近では、資産運用会社のエコノミスト、フェリックス・マーティンが、ベストセラーにもなった独自の貨幣史『貨幣―非公認の伝記』（邦題『21世紀の貨幣論』）の冒頭で、この事例を引いている（Martin 2013 = 2014）。

われわれは前章で、探究の目標として、二[注]つの問いを提起した。そのうちのひとつは、贈与が支配的な交換様式から、商品交換が支配的な交換様式への転換は、いかにして――どのような論理に媒介されて――生ずるのか、というものであった。商品交換は貨幣によって可能になる。とすれば、この問い――贈与交換から商品交換への転換をめぐる問い――は、貨幣の（歴史的ではなく論理的な意味での）起原についての問いでもある。貨幣はいかにして可能だったのか。今、ファーネスの報告によって知られているヤップ島の貨幣経済をいささかていねいに紹介したのは、ここに[④]貨幣の原初的な姿が現れていると考えられるからだ。

経済学によれば、貨幣の機能は三つである。第一に、交換の媒体、第二に、計算の単位、そして第三に、価値の蓄蔵。三つのうち最も重要なのは、第一の機能である。他の二つの機能は、その第一の機能を前提にして初めて成り立つ。そのような機能をもつ貨幣は、いかにして生まれたのか。経済学の通説は――というより一般の常識は――物々交換から、というものだ。物々交換に随伴する困難、欲[注]求の二重の一致が稀にしか実現しないという問題を克服するために貨幣は生まれたのだ、と。この通説＝常識が成り立たない、ということは、ここできちんと確認しておこう。

すでに、今しがた見たヤップ島の経済システムが、物々交換からの貨幣の誕生という説を斥（しりぞ）けるに十分な実例になっている。通説によれば、貨幣は、物々交換を成り立たせるための補助的な手段である。そうであるとすれば、商品の種類が少なく、欲求の二重の一致が高い蓋然性で成り立つような状況であれば、貨幣なしの物々交換が行われていなくてはならない。主要な商品が三つしかないヤップ島こそ、まさにそのようなケースでなくてはならなかったはずだ。ところが、すでに、ヤップ島の経済は貨幣をもっている。この貨幣は、物々交換の不都合に対処する装置ではありえない。通説＝常識が想定している「不都合」など、ヤップ島の経済にはなかったはずなのだから。

通説＝常識を実証するためには、純粋な物々交換によって構成されている経済を見つけなくてはならない。だが、デ[注]ヴィッド・グレーバーは、こう言い放っている。「数世紀にもわたって研究者たちは、この物々交換のおとぎの国を発見しようと努力してきたが、だれひとりとして成功しなかった」（Graeber 2011 = 2016:45）。

厳密に言えば、物々交換らしきものがまったく存在しないわけではない。その物々交換すら、通説＝常識が想定しているものとはまったく異なった様相を呈している。つまり、その物々交換には、[⑤]「交換の媒体」としての貨幣を生み出すポテンシャルが孕（はら）まれてはいない。ヤップ島の

例とは対照的なケースを見ておこう。ヤップ島は、直接の物々交換が十分に可能なはずなのに、すでに貨幣によって交換がなされてしまっていたわけだが、次の事例は、逆である。つまり、外見上、物々交換に見えるものが実行されてはいるが、経済学者が想定しているような意味での、貨幣への飛躍を予感させる要因が、いささかも見出せないのだ。

それは、レヴィ＝ストロース[注]が伝える南米（ブラジル）のナンビクワラ族の場合だ（Levi-Strauss 1943, Greaber 2011 = 2016:46-8）。ナンビクワラ族は、狩猟採集民で、きわめて単純な社会を営んでいた。つまり、彼らの共同体には、性別にもとづく分業を別にすれば、分業的なものはいっさい見られない。彼らはおおむね百人程度の――ほぼダンバー数（脳の大きさから推定される集団の規模）に近い人数の――バンド[注]を組織して遊動している。物々交換を思わせる交易が執り行われるのは、あるバンドが、自分たちのすぐ近くに別のバンドの焚き火を発見した場合である。

バンドは、相手のバンドに、まず特使を送る。交易を目的とした会合を開催したいとの意向を伝えるためである。提案が受け入れられると、バンドは女・子供を森の中に隠した上で、相手のバンドを野営地に招く。それぞれのバンドの首長が儀式的な演説をする。演説の内容は、相手のバンドを賞賛し、自らのバンドを卑下するものである。この演説の交換は、そのあとの実質的な交易にかかわる互いの言い合いの伏線になっている。ある個人が、相手のバンドの誰かがもっている物を欲したとすると、彼はそれがいかによいかをまくしたて賞賛する。逆に、ある男が自分のもつ物品を大切にしていて、それを与えたときには高価な物を得たいともくろんでいたときには、例えば相手が自分のもっている斧（おの）を欲しがっていたときには、決して、自分の物品の価値を誇ったりはせず、逆に、それがいかにつまらないもので――例えば斧の切れ味がとても悪いなどと言って――、それだからこそとても人に与えることはできない、自分はそれを保持しておきたい、と主張する。また、交易に先立って、両方のバンドは武器をおいて、一緒に歌い踊る――ただしその踊り自体が、戦争を擬態しているのだという。

狙いを定めた相手の物品を褒めそやし、相手が欲している自分の物品を貶（おとし）めるという言い合いは、怒りに満ちた口論のような調子で続けられる。そして、ある瞬間に合意に達するわけだが、合意かどうかの見定めは、当事者たちにとってさえも難しい。というのも、その合意は、むしろ決裂の外見をとっているからだ。すなわち、合意に達するや、それぞれの側は、相手が手にする物品をひったくることになっているのである。どちらも、決して、自分の物品を相手に手渡したりはしない。そのため、ときどき「合意」の見極めをまちがうことがあるらしい。あまりに早く相手の物品を奪ってしまい、口論がほんものの喧嘩（けんか）に転ずることもある、とレヴィ＝ストロースは記している。

この取引の全体は、二つのバンドが一緒の大宴会で締めくくられる。このとき、隠れていた女たちが出てくる。しかし、ここで安心してはならない。女をめぐる抗争が勃発することがあるからだ。ときに人が殺されることさえあるという。

以上が、ナンビクワラ族の取引の様子である。これは、「欲望の二重の一致」をもたらすような貨幣を用いた商品交換への発展の端緒と見な

すことができるだろうか。できない。次の二つの理由で、である。第一に、これは、よそ者同士の偶発的な一回的な出会いをベースにした交換であって、反復性や継続性への意志がまったく見られない。多数の物々交換の中から貨幣が生まれるだろうという説明は、親密な者たちの間で、長期間、何度も繰り返し、継続的に交換がなされるということを前提にしている。しかし、このナンビクワラ族の物々交換は、よそ者同士の偶発的な出会いであることに充足している。これは、貨幣の苗床になるような物々交換ではありえない。

第二に、この物々交換は、（貨幣を用いた）商品交換よりも圧倒的に、より原初的な交換様式である互酬(注)的な贈与、つまり贈与交換の方を向いている。レヴィ＝ストロースによる記述から明らかなことは、ナンビクワラ族のこの物々交換は、非明示的に合意された奪い合いである（明示的に合意されてしまえば、奪われたことにならないので）。奪うことと与えること、あるいは奪い合うことと与え合うことは、正反対のことのように見えるが、むしろ、表裏一体のこと、ほとんど同じことである。与える場合も奪う場合も、価値あるモノが一方的に移動するところにまずは本質がある。互酬化される場合でも、それは、それぞれに独立した一方的な移動の合算と見なさなくてはならない。惜しみなく与えることは、惜しみなく奪うことでもある。同じモノの移動を、始点から見れば「与えること」であり、終点から捉えれば「奪うこと」になる。奪い合いのような様相を呈するナンビクワラ族のこの交易は、贈与交換の形式をとっており、ここには商品交換の形式へと向かう要素は見られない。

与えることと奪うこととの間の表裏一体性は、協力することと戦争することとの間にきわめて近い関係があるということをも暗示している。今紹介したナンビクワラ族の交易は、全体として、戦争を擬態しており、実際に、戦争になってしまうこともある。与えるモノが、受け手にとってプラスの価値をもっていれば（本来の）贈与だが、マイナスの価値をもっていれば戦争になる。ナンビクワラ族の例では、したがって、祝祭的で友好的なムードに包まれていても、二つのバンドは本来的にはむしろ敵同士である。とするならば、ここから、貨幣が直接に生まれたと説明することはできない。商品交換は、両陣営が、最初から協力的なパートナーであることを前提にしているからである。

（大澤真幸『経済の起原』より）

※設問の都合上、原典を一部改変した。

語注

・インフォーマント……研究者にデータを提供する人。

・二つの問い……「贈与が支配的な交換様式から商品交換が支配する交換様式へは、どのように転換するのか」という問いと、「そもそもなぜ、人は贈与をするのか」という問い。

・欲求の二重の一致……「私が所有する物を所有する他者が、まさに私が所有する物を欲していなくてはならない」という、私と他者の欲求が一致していること。

・デヴィッド・グレーバー……アメリカの人類学者。
・レヴィ＝ストロース……フランスの社会人類学者。構造主義の祖とされる。
・バンド……狩猟採集民に多く見られる、未発な社会組織。
・互酬的……受けた贈り物などに対して、義務として非等価の贈与を行うこと。

問一　傍線①「ファーネスを最も驚かせたのは、彼らの経済システムだった」とあるが、どのような経済システムか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　たった三種類の商品しか取引できるものがなかった。
イ　美術品も工芸品もほとんどなく、取引できなかった。
ウ　初歩的な物々交換で成り立っていた。
エ　複雑な貨幣システムが存在していた。

問二　傍線②「この推測の前提自体が誤っていることが分かってくる」とあるが、「推測の前提」とはどのようなものか。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　フェイの価値は、大きさと粒子の細かさなどが関係するということ。
イ　フェイは貨幣として最も不適切だということ。
ウ　貨幣であるフェイは、持ち主の間を移動するということ。
エ　盗難防止のためにフェイを貨幣にしたということ。

問三　傍線③「もっとはるかに驚くべきことが成り立っているのだ」とあるが、「驚くべきこと」とは何か。最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　村の中の誰一人として莫大な富を表すフェイを確認したことがないこと。

イ　海中に沈んだ法外な大きさをもつフェイが、家の壁に立てかけられていたこと。

ウ　何十年も前に、フェイが海中に沈んだことを島民がみな、認めていること。

エ　フェイは海底に置いてあってもその市場価値を損なわないことを、島民が認めていること。

問四　傍線④「貨幣の原初的な姿が現れている」とあるが、どのような点が原初的なのか。その説明として最も適当なものを選び、記号で示せ。

ア　物々交換から、貨幣を介した商品交換に移行途中の経済システムが現れている点。

イ　価値の蓄蔵のために、硬貨以前の硬貨であるフェイを貨幣として用いている点。

ウ　物々交換に伴う困難さを解決するために、貨幣を使った経済活動を行っている点。

エ　商品が乏しくとも贈与交換によらず、貨幣を使って商品交換を行っている点。

問五　傍線⑤「『交換の媒体』としての貨幣を生み出すポテンシャルが孕まれてはいない」とあるが、筆者がナンビクワラ族のケースをこのように言うのはなぜか。その理由として不適当なものを選び、記号で示せ。

ア　相手がもっていて自分が欲しい物品は褒め、相手が欲しがっている自分の物品は貶める、自己中心性が見られるから。

イ　よそ者同士の偶発的な出会いをベースにした交換で、反復性や継続性が見られないから。

ウ　奪い合いの様相で贈与交換の形式をとっており、商品交換の形式へ向かう要素が見られないから。

エ　商品交換は、両陣営が最初から協力的なパートナーであることを前提にするが、二つのバンドは敵同士だから。

問六　本文の内容に合致するものを記号で示せ。

ア　ヤップ島の住民は、貨幣の所有権が他者から認められれば、それで十分満足できる。

イ　ヤップ島の経済システムは他地域よりも古くから行われているため、原初的と言える。

ウ　デヴィッド・グレーバーはナンビクワラ族を研究し、物々交換の経済システムを確認した。

エ　ナンビクワラ族の取引は戦争を模しているが、終わりは大宴会となり、平和的に終わる。